

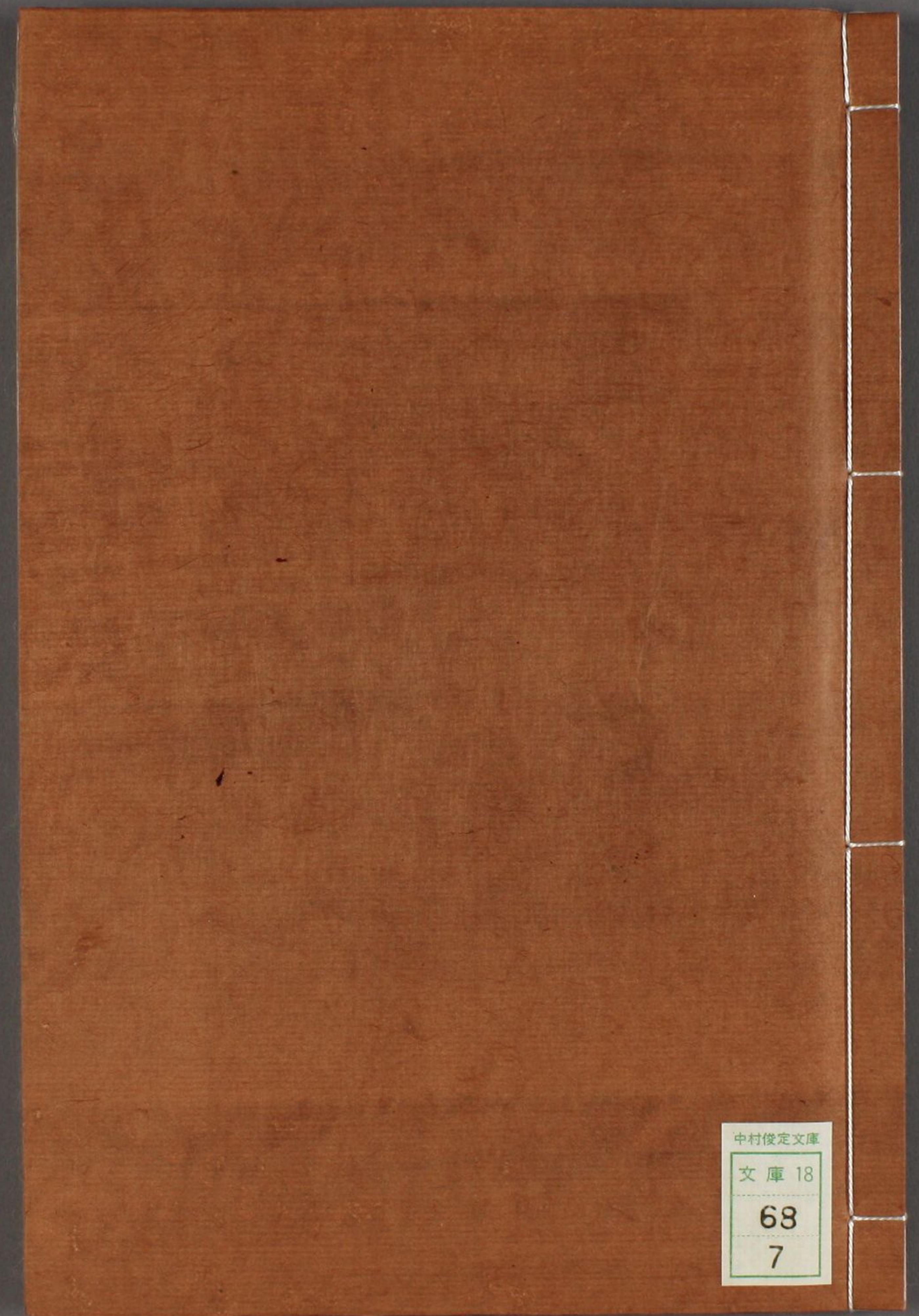
9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

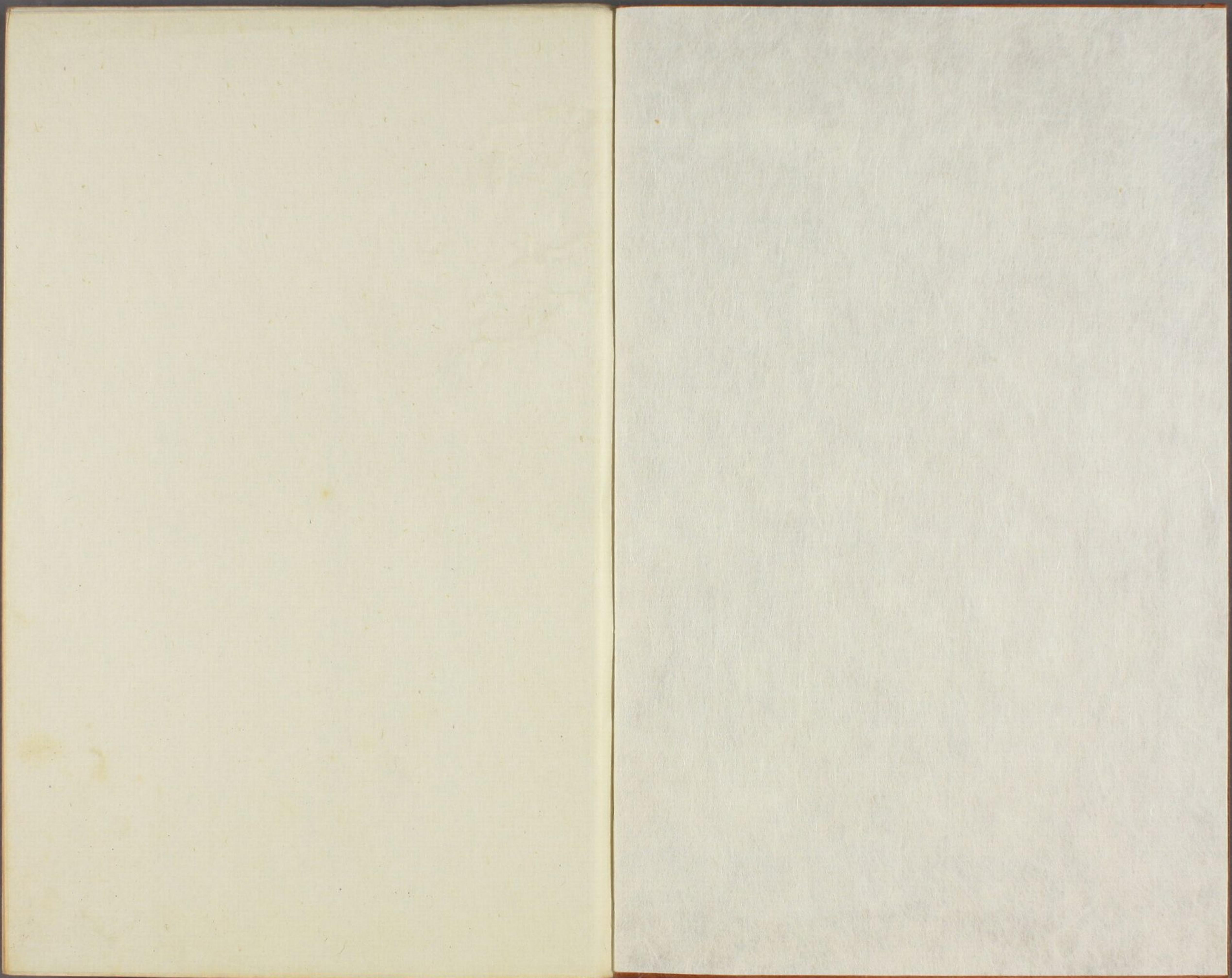
90

70

0

中村俊定文庫
文庫 18
68
7





玉海集追加付句卷下



雜之部



言にゆくのもあらそき約束

伊丹豊嶋氏
重紀

うううり四季の次第の面也

うううすゞしき小面の定

春の梅冬の雪とて真あつて

因

うの月にわくらまくも月の初
ちよづくともぬぐつる連中

橋川要吉
正則

まくもむかひなうと秋のあ

並並ふもやうよしもんりく

伊賀士野
大井氏

木にひくねいあふとてよしや

大井氏
重次

因次へゆくせまくひまわ

君城ゆくとけりまよつて
心やさきかに美思城やうなり

紀伊守
定吉

毒うらやううううや

御みまつむる病あり
久しく音一月もぬく

君のあくびをうそうと

儀故太きたくてう

れつうううううう

おゆのよみうるすあじ

ほづれおゆのゆに

大津篠原氏
秀村

集

度よそぞく家の大實

井代

重次

時ひれど謀叛だめ

万民のうもしはくまつと

江筋佐出
宗正

それくわ役哉ひきにやまきう

成人されあまますかう

大沢氏安
生穂

爰のせひづらひの口くせり

もづりまよのふきよ

前畠野
を方

よもえアモモの老老

りよそよ、根、枝、枝とねぐら
一分つとも余やだ。まし
料理する薬の包装法ひよ。重慶
たぐりをくうのとけ山のほ

大井氏

七里のあらひもひ成せたとて 利宣

あやうりやとおもやう思ふ

人ふくとまことうすて股ふか 定利

伊藤氏

まうまきうあうまやうく

あすせは燎治があもトモキ
みりんとも書のまゆ
醫者のめぐらやまゆいせん 正作
ゆめめぐらや氣やちゆく
ねもたくへいく産の伽
東あそくわ清切やくそん
登へる氣うらうれう氣うち
あむけあうてやれとあつめ

放ちやる龜ハ沖より陸むひ
行財をそれのとひてそれ
ふともじよ忌日あうと於成行白若氏
よあすとそひ君は腹をも
産はよけとこめり何ト琴
育立のゆきの伝あそあ
眼病よ針とたまつたまひ正秀
署き成らんやキムル

免すくより蒸食せよ
大坂岩脇
去男焼一退屈をす
病人れ捨てゆきれ敷か宗方
よとれゆやくよとれゆ
厚毛紙高よニ至らうま利宣
英氣高き役がおとぎゆ
川やハクの鳥はすれ争可那
むすみとまもとまもとあん

ニあらわら成志の双六 内
申はい鳥一卦成志もうて 月
形見もえてももじらぬと
あてねぐとなく 猶の卦 おま お友
日うよらとやひうし
弓のさす 体ノうちも小瓶 おま
風呂とあくをうれうん
ゆきとあくと射をまひ 因

近きあらわらやまくの末
馬のわすのみみゆのほひ 長之
やりうそむとよしゆる
麒麟の角の肉と角り 本井氏 重次
を目の意へせじるる
双六の賽に重五の切りみて 越前福井吉 笑種
そよふとひね东れもの
そよぐの助立成すりひつた 兒玉氏 貞則

このと身とい氣もあ威

すとせ宣荒よひき哉をあらま

南都松氏
移

西とうんすうとくえうれ

茲能の奥づつて口封や

利宣

くふりをひくをゆゑ

きくらもてつやう

敦賀
定利

机捲の形の絵紙絵どうぞ 可

れのあゝよもうすりあめ

机捲の形の絵紙絵どうぞ

可

は繕ふと成ひての碑之

なちもうちもとくやけとく咒よ

丹波鳴屋
正好

少用へ代せのひやふ

金門の病へ日ひよおうも

重亮

うくらもとくのをわ

結縁のために茅ひすうそ

大津
光純

衣冠の身とも衣えり

四文まで金を一葉凡一毛に

村松氏
重景

まにくまうれ焼うれと
くまくまひあひあうまでむる 可れ
えあ筋山成うらへく
庖瘡乃うとうと糸のよみとて ト琴
人みなもんをあまうて
志けく豚代うくつう神 宣
麻うくんともよめうえさ
立やまねおうりてまめの文のは 可れ

肥は腰すき

地ハツアセカムアリアキ
諸多紙翠の鬼病日止ま
山きのめあうかふのめあ
萬る人氣吸そげる 利宣
紙とやまひとげるやまと
飽食の上に太腹生すれども 持割宮水野氏
わざわざわざ 緊引とて
みづづくよも桃の庵 利宣

日暮とて塙を出里きりむ

膳のまにあやめの辯ををひもせ貸資

大勢らもう城、あすこよ

山川よりれやう者のお救井氏

重次城跡川井氏とびだるあ

あつとねのそとにつづくの川井氏お真

材木に登くとまうりあ

あもしろさに城の要害元義

八

せりあひてくじとむれや
新兵二兵丸一もかふそり
わづけりとあ笑ひと
切ひやうのひくひりと
歎をうわだくそやー一文
うとひきり軍場井
かまびきうなりのゆーきあ友
老たの隠すらばせたまふ

方こそせよ大塔の言 忠興
油ふわひさしき口ホカ
拿ハグた一画に桶ハシケりして 一重
すくらよ勢立ハサシタのりハサシタ
のうもぬあをありて 今自 肥後無事
翁カミとつ桶ハシケみハシケ
唐破内カタハラシナの桶ハシケみハシケ
日ヒれて がやうして もん里モンリ

用意スルて そり車ハモチ 定利
ひそひそりて ふう軸ハシの地
輪扁ハムヒンと うりー車ハモチ 桶室
そくひて そく一文字ハナタガ 外
桶ハシケひもと ひを拂ハラフ 本ハタハタ 次
岩イシ川カワよろびて うるく行ハシマツ
太ハサクちのわう桶ハシケり ひりと

江 なつまくのね桟、
又 あつしとひよん立く
のあさまやあだねのこ志之
想
月次下

かまびらうりたれあ
もうくへ下の小人荒川氏云共
ありてきどらそあまの裏
墨も横す
切のふ春音

さひまくのあらまわ
えより泥のすくわ
いれかをあまき人重紀
山のととくらる市の場 不必
百ゆくらしきくわされ
閑てくすや小念のえ紙窓 利宣
おりとね難いき坂の実
まくらやほの木足のすを
有翁

病氣ゆゑ今もやと人すりて

名営家のものもむ官爵

相州生野内海

吟咏跡うち多ひ善惡

貴之のすくいと遊焉うるん

彦根岩脇氏

あらめ流ことわづかん

咸淳かす人のたまよかられ

村松氏

也云現をのぞへあつた

教なるきありとおに難せられ

尾州俊昌氏

之類

支干の文字こそやうえこゆ

耳うつにゆゆうへくわうのた

春宵

天神まづりとくづりみづり

くづく金ふきあはばはう

櫻舞のゆはくうりあづま

ほる浦あ波角はせうふ 春宵

じもとの伏おとくとく

善えり其加のやどひうるん

紀州木村氏

富巣

たまけたまへやあもじつふゆ
とくとくとゆひにそりる吉利舟可れ
さひのかにて湯ひり
まん丸ひんもれうの筑^{桜山氏}若英
故やれらそとれより
ゆきと君の葉舞い匂をとて
おうきととけくにね殺
黒びくひて子とそろはまかわ^{一チ氏}金

我よりとむかへやとくの
物のあひとよりの門のうち 本
急進のわがわく あそび
羽鳥のうすむちのととけて 固^{賀賀加金次}元
失ひるすれやくめん
葉はくれゆる時の不便^{京奉}重永
かき金^江あるや門のと
山林魚か持^江そよ ま方^{日野}

いはのをノありけあれと
ほもとノアシのつもやう

モ之

くくく初ひ草ノそそ
おもむきの境ノのうとひすみ

新嘗
樹傳

西海ノのりのうに萬ノき
氏ノうへすなり

ま

あわとノ日卵ノに山

可

もも我面ノもさつノせ牛
れ政ノのすゞノる雑取ノれと
人ノあらノも驕ノる人ノあし
平ノ開白ノと呼ノる時志ノ月
ももやあノすゆの着衣
おとづゆ源ノう邊ノりとノ重次
わきの歎声ノうびとめ
古風ノのあは仕あまノ也

丹波山家
翁

り うとうとう水鏡
甲三三、民者争ひのり、む 利宣
うとうてのうかむ十
篠塙、あらわちぬくる
やくびとと一門のキ

教感のよと甲斐にけのサ 重文
サのうと和ひ利モレ
羽衣の花もいづる高麗扶桑國 羽衣
未だ

まくとひのひ あん
乃翁よしよりしきそとむん大井 宣次
おきのあで越えうきも
轄くわと馬のくへ 宣次
抱をあひへ何とせうや
梶原、跡を辞のえとすか也之
うとう太鼓の時とき うちれ
軍はさやうて城まき ありし 正信

手にありますりぬつ馬をくせ馬可れ
新馬草の用をすりり
城とりへ立候あらばうるそ月
あく處を難かとおひりてゆり
るはうけたとふ人
うやあ中とぞく這とく
うやあ生本言ひうひそ
又殺千鷹となむれ松
祝辭

定利

まあうれりぬのよ死
たゞひよと死つゝ入られ
岩穴のそき引ハ作入て之
新田の竹もあうけゆる
名字名無ひきうんとも
よ死すてば死後よされ
儀ひゆうてうゑひし
あく代までいは新太夫卿中嶋氏
款宣

ゆきのふの脇くわみすり

起てあくよくうら義家

佐野義小川氏

章

腰こし筋すじの力ちからよくせうて

水戸山縣

をぬう下しもよるり一いっまのひう

不競

かえりあはれぬこと

波利ハリかきの会え教きょう半はん身みを奪だつて

力ぢから

比ひ翼いりそりくひくみとすれ

うする軍ぐんあるべくせ

舟

うする軍ぐんあるべくせ

舟

よ落おちひあつへおうん聲こゑあけ

大おほいといとりてう勝軍かつぐん一守

まきまきとそのも益ますいづめう

軍ぐんの前途ぜゆいそよ武士

高野山泰

引ひつねねすもううるよ馬

えきえきの東ひが付つけの世よもくされ

うのわわそ味みくされ

毛けのひ貨か軍ぐん場ばのうう忠

西吉水勝代

あくねしきとよきすには

よりくさのひ連板の文づみ

荷物及爲民
之宣

御船の一弓下すありすりて

ひそく下くも謀叛あや一毛

宇都宮太義
等

めくらあつや歎どるれ申

生捕と車て大法引とく

野呂氏
山井

よひきひゆと放内そく矣

まくらい猿櫛猿櫛うとのあくと

志興

編首つゝゝとひゆき
並願寺及出火

云故

百日大と射つゝとそげくされ

ねづりのあつまをふそく

は的のきくのかとくわざれ

経たゞれともさきひきつれ

かきよと禁古にあつちう

舞

梓う宿う伏射うハむくもや

梵益

おとせしとせすとすとすとすとすとすとすとすとす

おとせしとせすとすとすとすとすとすとすとすとす

月次

自室をすういきちつとす

近づけの歌とすとすとすとすとすとすとすとすとす

あやめの家の戸

江別佐
宗正

せの音をうなづかせるとき

ふきと静う舞てたまう

生歌

すと眠りすとそらの神

ひの船とれのとく

肥後國
正徳

腕と頭と身のとよよよ

はく枚よ箇箋もあく宣麻

伴氏
資次

おのほれぬはく宣麻

漢書と小説とも讀み

短歌の火とほくとゆうと

一雨

鬻書代すぢなむとぞや 巻首
つんとてよつゆのと
個目をすむをひき
くわとめ そや海を
文字を詠ひまふ言され
鬼の月にて復くとも
文字がつくりゆきもり 利智
小うこよみどりうてひ
本ま
重次

及第とのさうの筆あらへん 円
すんの弓を圓とひまひ
弓の吹きあくらりあす 一雨
とりやまとあらそひ弓
あ弓また袖は疏翰の會 雪西寺 三周
引ひりてきて是やたのむ
歌のねじりれつひ歌の曲 未矣
宣げやせはづかせ下ふ

るやあれ移へうと中
井

せにほのとれだまを整

蝉 われとす翁竹をしきつて 内

ね見やれあまくさく風

年 とくとくとくとく

あそ丸と情じりぬきゆ

翁竹とわふわふわ

翁とたゞまのうもす

五

とく世に翁翁とまきやうり

可取

あらへみちへうちみれ

翁や次やよほめて翁の翁

利宣

翁の翁や翁の翁や翁の翁

伊賀郡裏

翁の翁とのまろと味你

一以

天祥のとく翁の風ひひり

尚的

やとれりのと味你のと

尚的

とくのとくのとくのとくの

(中) トカミムホウハクウト 有
ラヨハシハアリテアリ
紫カリミタマスアリタマスアリテ 正則
モセレモアヒトモセレモセレ
ヤマヤモトモアシムハシのモノハ 山井
マシナハシナハシナハシナハシ
拿ムモルマムシのトモチ 野良民
松ノドリサヘタガタシニモア 朝観
重ニ

高野のゆきまくわらく
てのひをくわがたのひ 挑列西宮
毛のひをくわがたのひ 正則

且遇よへますあき極の味 正武
人もひだいどう(あけゆ) 鳥羽山 東友
かんりとあいそやか 鳥羽山 東友
あそれ共日うちとも食 人魚う片思ふももみ 可

本のわくこか

波成トヨセ松(萬承松) 田

カツツリヨモヤ國傷やまと

ね陰の原家薦(ひのきも)

辛(ハリ)海(ハリ)キテモ小島殿

シテスミル海(ハリ)系

辛(ハリ)海(ハリ)アラマツ

人買あれのとくも

松(マツ)れんせきひ霞(ヒラマツ)ノ

寺

室(ムロ)まで身(み)ひづてとす

たて男(おとこ)の下(した)よそやもし

和(ワカ)一見(イチミン)ハ奥(オカ)洲(ス)乃(ノ)者(モノ)

括列西宮住

重(タメ)次(シ)

ヨリ(ヨリ)れまくさうの白(シロ)墨(モク)

馬(マ)士(ジ)山(サン)の峰(カミ)の具(ツバ)やも(モ)

そは(ソハ)ちを國(クニ)のあ(ア)

馬(マ)士(ジ)山(サン)の峰(カミ)の具(ツバ)やも(モ)

寺(テラ)

伊勢守

伊勢守にとどめの壁へとて 長本

わうりとやつて町の花

ほきくの草木基石以打門 作着和

いとまよもとて往輪の指一里

報乃うちよのくふくれう 利宣

四面不方てゆくもやつも

三吉がさ室もとておうえん

との外無跡 なやまくも

一井氏
久金

鬼界りゆくひちあそけこゝそ

約縛をとむのこゑやああ

一のそじりれの松ヶ枝

高野山

沢元

リてといくよす軍場

一の空はれはくさりあつて 奉毛

硯の海こみかすみすり

定新

まね床えもあら薦のと

流傳のゆきよ船の處所
あ室
さくすくさうる毛の頭
風ふす伊豫地の船の碇
回
とくとくの波に移あはれ
けりくわ船の音い葉すむに
まのくうそひ四今上ら
あらすす海のあの石波みく
大井氏
羽留等鳴
正次
うとやそひ旅の草外

舟中、浦に暫時うりうり
うらもりうてうんうん
船舟にさむかわくうせのま
まゆすくうすくうとくうと
見ひうふ例崎江差道のうのうのう
丸くのまんがいのこ
橋板橋の中つりして修理あり
國國やる系の橋の修理
可れ

左の言ひをわうと
たゞせんや蛇のね
貪りのまに長者のふれ 禁物萬吉付
つてうどんをしゆる
うもすのれいをむかへ
ひよとてちまくのあらや
人形舞ふうすゑ
うのまけたちとみゆふ
不寐

七食く残すすめり 楠堂
埋めていそは生一 通
あらひのまの國までせぬれ 丹波出家
年でとくうへ冷あし 山翁
走れとくまばり、まく 伊達家
友隨 疗とくとく食まき
條の里でとくやと商人とく 井氏
りて極る世界重次

感 き されのがはより能うて おま

弟てちよと鼻やつてゐる

まみの枝の西はさけゆうり

新利豊義正

三人、極あくまでまうら

もてまじわる、夜の秋

神まじりそぞりくられ

まじりゆまむまじりへ俄々

ぬねの日は宣城めすり

日脚よひゆきてゆまくさん

可れ

夜よううて御代ひしん

人中よ浦ゆきよめくとれ

まゆくろくゆせ行え

よあきくらひあらむ

えもうまれの人と名別

まくよれ卦ハ何とま
るゆくよくばひ引く

宣利

新室

とひあくへつうひす
近葉室やあはくかん 円
ちづきなれと人をかく
我あへよもあそそくして 同
わくへよまくとよせの端
皆人のふにれをありて 馬口
自然の用よ門脇のうえ
どうやむ信をよあるひとゆえ 江戸鶴
羽州房井上氏 重氏

津のあく しまづう判
傍鏡とするとそぞる一を正
あやくちをあやかめらむ
つけくく まくめく 同
くみくみ くみくみ 千秋も教子
海よりと不育の聲をひあげて 退歩
垣内や日のあはれをもとて
よりうちやく 唐納 荒川氏 云

あらへてうらり墨をひき
於此一箇のあせばうへ合
あくまのとみゆきと
うそとお眼鏡とくらし 本氏
おけつけよ双さざれ
すうじよの信承にまよひ 長之
あるの法法のすくま累て
やうて新とそむ升つと 同

みやけり りかくちやく
娘君の蟹カニの名あやおもん
中ねよかのなかのくわや
蓬の魚よ娘のそりとも
うとのやうわくもくもく
浦里よもよくわくわくもく 次生致
月次ア
らばいあすよおほせと

惣寧

ひよひよとて家ゆゑ
みもく背もく衣もく
わものとてひよくね
がれこむはれす
うちのゆふきかおそく
もとくる魂ひづき
葉火を窓うるをあつて
強盜のいやとよに冷
ト琴

三木勝盛

誓華屋大
吉

廉相よつまひすあり燒汝
ねぬそくにハ魂のむかで
ひりどりの焼亡乃あや
薦門廣眞峰杏
島下するハ妾トの夜あ
えふるをやむほむる
なれかよかあひを
地有きを

宣利

あきづり

あきづりをひらうけもと

あれどくさう西およう家

ま之

黒と改めたりと申たけよ

兒氏

猿やうるわのりとそろえ

蟹

ありゆりだのうう

可れ

ゆゑにや前事もまかん

皇

升殿とこそをものまこと

皇

東つるむ葉の獅子あうひ

長之

氣はうこむうとうとくま

長

わを時や虎もひう

長

強きううあるの頭の骨ゆ

月

お齒もあううのまゆひ

月

それ後かくもうのまゆひ

年

うのまハねともうかた

年

くらうううや牛とくが

お

江戸に還郷を候され

月

いと今とつるやや室跡
帝の御所も御手のあん 奉
玉經をかきとるへり郭
蟬丸のまひあさくらよ
未だ
竹籠のつまみをとぞくれそ
拂冠の厚き持禄の家 宣利
えじうくわきへきとぞくも

まきとせりとゆり行つてよ 鍔

越前福井安清
章房

仰き下にひ度氣の地ちす
ついもけの奥へりへ費 貞室
宴許やのあらの院のむすりん 可
い原よひそやとく下常
櫻えりいに風のねりん 東光寺
貞
一わんよたてこひのあら
かまひすくよもくも食 宣利

よか
うそにて言ひうき
楠カシノ木の城カシノシロセラリ又 宮方
たぬくにせりよまつる
生作ナガツつけ金糸キントクのタマ重次
汗アヒれさせアヒレサセキル
陣中ジンウは豈ハシタにらうなぞつけ 同
引アヒれ 神カミの事カミノモノ
うち戻アヒタをあうとよりもて 草シダ

火成吹ヒツギゆかこに雪ヤハラの友
嗜シ三ミの壺カネよちう茶チャ成スル核カタて 真觀
身フすアめアつアれア風カキと接摩スル
ひそヒソて祕慈ヒシよねヨネふゑフエあつアツ山サントト夏ハ
ひうみヒウミのそソおオりリ今カ
捨スうウじジふフ船ボウ櫓ヤマをヲとトあア四シ方カタのノ京キョウ成スル年イ中シ
よこヨコにあ泉水アツミズわらう大石オシガ本ホン房ボウ

月をじうの木^{ヒノキ}とくぬう
梅^{シキ}のれ緒^{ハナシ}くされ地^ヒのあれ

作書知

もみ角^{モミカツ}竹^{チク}成家^{ナリハ}もくにて

月次^{ツキシ}の者^{ヒト}しよ 河童^{カワヒメ} 奔^{アサシ} 宴^{イニヤ}

足^{アシ}也^ヨむうち^{ムチ}を^ヲくめ^メ下^シ
千匁内 ようくと引^ハわら草^{ハラ}頭巾^{タマフ}

ま社^{マサニ}の神^{カミ}と名^{イニヤ}まね^{マネ} 独^{ハシ} 月^{ツキ}

天狗^{アメノコ}の地^ジ秋^{アキ}ま^アくらうり^{ウリ} 肥後田中氏人

章^{カタ}ほのね^{ヌメ}あ^アくあ^クす^スや

天狗^{アメノコ}鷦^{トリ}と^トり^トて^トかんす^ス 貞室^{モロコシ}

天狗^{アメノコ}ひみ^ミと^トす^スか^カす^ス

火^ヒつ^ツる^ルや^ヤた^タか^カの葉^ハく^クん

院^{イニヤ}の山^{ヤマ}よ^ヨひ^ヒと^トこ^コる

ね山^{ヤマ}よ^ヨね^ネの天^{アメ}狗^{ノコ}あ^アま^マり^リて^テ

月^{ツキ}

おもろくとまにそろく火の車
うちまゆるや二位とくゆ先 円
ひやくとよすてよれの東
あくとゆほのこう小役 円
千ち内不孝のふきよ梓の親の身
時宗う狩場乃首途あとぬけ 円
くそれ人の成るむをとくう
制コトてもまかねる吉利支丹 円

ゆゑじよれの教あり
あくあくあくうてのけくわ
きぬの家のやどみゆらてまふ
千ち内ニツヨヨク石へあやーに
骨法のよだらちをふき身もえ
印花の壇をとひくへ破り
よゆく武者、みすりか扇
考すに袖へわきぬ親の墓

都つうやをすまくと
あまく下界にくわうるえり

極厚

ゆれる電や陽焰の玉

日

耳の病成らう妙風神よあて

日

さとも名譽や曲赤の馬

日

枝ねよ難題ノヤサマハシ

日

夷中のものをみぢひけの神

日

キトニハアシテモ空氣知れ

日

のふとひよきうどむけをま
かの表紙の糊つげそとまき
色のきわくわくも糊加減
無念やとくとのもわくわく
立波壁よりもまづ清あ
きのうをゆくとてうの庵あくとん
りもとよひにてあつまひ

内

極厚

月次ノ

貞室

鰐

のれよくりよ敵工の雖
詔うつに鹿根と一すうち也
森立一鹿根も絶と稱せん
ありゆ町へ物引もす
そりるゝくり塙の用ひ
里のよりあまむか去鰐ともへや
左ももう納のよし／＼あけて
茅茆ぬまと拂ひださと

貞室

久くよづれあく見ゆて
くらゆのとひ急些城やとひ
せふき合せとくや日ひもく
勝と薩摩の利益ひうーん
あまの佐古もやきことうを
島りすくも並うー、
あくねすみの用ひ哉する
き員といはざとと伽の考 円
貞室

友とちちより居て出
もうよお仕事うへう

かくかくもまれの蠍草

卵とひめどりの鶴づあくゆて 梅萼

とみ湯をもがりう詠すまひ

野瀬氏宣利定

徳代謫縄の味えこゆる

神興もくよゆくすまひ

かわの尼のえや成笑止

貞堂

まつりてあらは無ふれ鷺
齋札のくす付えうりく
あ物すの眞羽加羅不勤作
石のまゝの難城のう
人きよしよたひねとう
よきよけ風とよく、まく
ひくとくすとよき墓原
ひくとくすとよき墓原
ひくとくすとよき墓原

瘡ウツヒつら今さらよ
全曲たゆう成ふくりよ
残目へすこまくらうのく
侍守急心いたすくらむ
湯つやよみとづねタマリり
まつまで飛城をきり称れ
盜人のあくらも属陀
朱あざれや冉とうしん

内 内 内

雲母とまくらうゆまくらう
和光のむかみくらうゆまくらう
さのうて口辭は成さてくせ
ちまうひ四れちまき中く
くくりゆめむじゆめむじまく
すりてうやむひうゆれのまく
あややわよちくにまく
のねれくとれむく

内 内 内



前

あれへあのせそのんま臺
不淨とせりてあら紫野 因
くうくちや城の東内
光のすきすき娘君よち山 因
お外一山伏の袖ひきそ
が見ら人の目アヌアウ鬼 因
さののねひそりくらみ
花の教一画てとふ 御左近 因

立聖代をうりへ舟
やもすももるほどの音あ
トるーてゆいふありそり
白河の秀すとよ秀名前まで
うつ月ときれよゆく玉の弦
長流よとやなだれみもす
八橋をとやすじ業平
一ふ聖鑑めくらうり 因

れひけらむと格
判官よほまれり成され课せ
棕ハラいねもそひまよあ
簾中ミツルの里ミチの無所付ムソブり
トト壁シテに鳥深付ハシタの壺利
坐スル鑿ハサハシ妻メイにままで出ハシマるハシマるハシマ
月次ツキシをも身カラの

うち

かまくらまくらまくらまくら
能ハシマうううれいくうくうく
縫ハシマよひれてたゞく育ハシマ日
りてあつ面ハシマもゆも糸ハシマのきハシマ
甲ハシマの法ハシマをや月ハシマよ一めめ
うつうつちよひつまく取ハシマま
引ハシマやまく月ハシマ新ハシマよ望ハシマす
やハシマ望ハシマは跡ハシマこどすよおれ

ほや、真壁の寺

大もじらひてけりとくせん 円

ゆうへつまく津あらはん 円

うけめの佛のか袖（カフツ）まくらで 円

されてこそ水をくまくらめ 円

茶釜（カブ）の洗（ハラフ）せてほらもし 円

ままでまみみのよびひ

うだかたるやまくらふるん 円

ちのゑぐらひ 猛きわく物
文字成るけのからくと 円

賀之那

圓い又下（モロミシタ）かくわくを

圓古やくにすまつ思う代（カタマリ）高野山

あやうゆきれうの筋

年とたずの夢のけ

前後集

正直

春秋と留まつめりは

さよ

君うきりへく歎ち長生 貞室

詠諧農集より承じの比志那跡ニ即
乾寧といふもの近に國へひそむと
信清園に住す 住し 晩年とぞひ
すれども國戸おほきのはくあら
聞古と一色名を字號とひくよ
火集はといふ書をほりくせふ

と弘りよりひやれを人へと傳と
もあらわせられ利害に程を重て
承師松永氏自徳先生と石庵一室
主は堪えかはふくわといふ
ものあはく侍の申る親童重霜と
いふ者よりひづれに背ふわちひ丈文
年中わらひ事お發高行向と

持て一集とみ後て師の詔へ
かと雑文名文をじと併そ
かあるちうあひを経ハヌ利
トと云ふ類ゆゑ章をへりハ黒
止つや思つれし大筆はのみ
よなれへて大手草とつゝ題
字ととある二年こちと改め

重頼筆とどり親さんとひとよ
そそ勢利山田の向帳とまえ
郊鄙の匂と集つてありま
う仲ともとく城内刺師門
すも疎うやされと彼草安らぐ
重頼うておせいかハ頼止として
一千五百石と集め草を集ま

二の次一ね落丁

未だ道弟とひ者わやり新
一集と作まへて徳師よ詰めて
終はれんとゆきまわばら鷹
築波と号す山中あ飛書せ
さむかづくと作せば行こうと又
峯山集と名づけられ冠井徳
月余れまこれより當道まく

監よりれま術やのとて自徳
きのまよあら玉海集をえほん
とよもて風と有利名教とけい
のやくの人道と勵しよ此集すよ
ノ病とをうしなうその功ひよ
おうしんとすよともしむよと
と病床にあつてせ定貞哉あよん

強至漏集と権法せよかうき有
あはのとくれ ゆ經典と讀くは
濟くはるよ應をぬくへり思ひ
了却に因師かく遺みそじくふ
不あくとく努力こくわく権と解き
ゆく極すよ取とくすう七師弘
兼すよ脩へ侍わぬよ此境を

陽州一魏士此櫻よりさかと
不のふ作里人船を追加せしも
其はれ玉海ようすよきとて
是へがともと船を追加せらば
子ねあすまつあひも墨を
玉海をうちを一玉藻をわす
うつかとくをう唐せ日農

3清書一侍ふとくに一頃年
をくつてある集既丁三十部
餘りにて一部より眼あらわく
不禮と窓よと我追加しき
行ノ右の半をく類をわ
くもあくわれこの追加

思ひ立候ハ十と努力あすま
心と努力と遍歴三十余巻集う
さく下にちじに櫻あれりけられ
あれども多是を薄く實一の
除き候ハもやうくめ追加よ
候か候者候は候もあらのこれ
候えんふり利ミテテケ罪さま

西勢廻しハ此と前利と跋
すれりて神志照達と立く
而してなり定一かくはしま
せばこれこそ思ひあらね多く
志櫻を達せんとほり一枚作
手をもくらひと云す
かく追加をあれハ人農つるを

福齋の入乃ヨリ事休ムラモテモ
キモチアリシハんとくもとけり
先に古事記集を窺ひテ字敷
か不一ま句と思ふる人を有す
而カソウスケニテ言うちはとさ
まれて強りとも御脚行らしれ
がいあまくお多集ノ利也

予人ハ一ま共一人もんハハ
第も他人も一人もん次もん裏
眾とあわせ防ひし櫻えび此事
うもあゆめへ作者よそぞれをと義
もれふまことおゆきとおれをと義
あゆ櫻えびお多集のよも
おづきあやましむむ櫻

と定觀の後もふ多くにものうそと
ことうへられど將來はども念
覺悟し御書の前後とくほへ
眞山玉海二集之後ハ尾陽集又
り草石金匱土塵集鷺鹿集
牛飼口真草物志京野大塗波
集拾玉集範肩鶴鶴集桜子集

多くの集とくつ物よ徳く文集
類とくと侍けどかくうせす
ふるやくわづつあゆ骨め句
なきくとも先作ととく侍
てとく代お尋人をぬくら
ゆくにまづくとくとく同
時代とくとく歌徳初之云梓

室も道を清じつと車用控え
まへまへてはくに况様子ちよもて
京ぐる四合とそわそひはよを
二夜云ひ候と六扇と秋叶
病と金匱と移動の事と及
集ぐるの圍了年号行幸日曆
としの里すらゆきのめの御所

題／＼梅竹せ／＼芝草書の詩
う句と七十句とあれう句と百五
十餘句書入の御室でまとて情わ
さんと筆と墨と紙と懐紙作
たる集はすと百句とぞ多く之彼
是武子と百金をくじけまわる
かは前後混亂れと頬う句と

毛かひまく百五十葉書付を重
いぬる信を三百句の處へ頃
一村とひよの清書をもてて向
板をもててあらうとひそむ道と
ひそむ事はあらひまつれ作事
頼ハ毛吹草と呼べ
追加と偏りといひ貞徳未序よ

とくに心にぬる數あれど賊の
糸をこゆふれんと想集事
の如きも一もとあつたものゆ
る所と申すが爲めに書
はるるも頼らるるもあつて
之と今やあらうとまこと利あわ
道を犯すつれ人の手を容難

さらむよよかのまひづれ
匂を追かと二集引打ふる
入族すとあくの居されとぞ
あくみ失ふとあくの作の
名角よぬすり又ハ自讚す里
あう桜志、集をかさすかがむ
ゆきほめ、園牛入をすとぞ

かくすれの追かと入居し作の二
集引とれむれとくわくはくと
くらびと多く申ゆれどもす
るハまゆとあくと四つよ人農
つとゆすとせんふ者るに在ふ
まとあるむる居て所すまへ人共
いそもゆくと今まお追か勤り

多々匂引と手記の如く後
云猶矣一是とれどもとてあれ
そぞひと泉と寫る國人種と呼
シ故へと也

寛文七歳丁未晚秋下浣日

一囊軒

貞室

土

洛陽東六案

平井氏刊之

十二

昭和十九年八月二十日
午了

